

帝国主義戦争と民族戦争

一〇三 ゲ・ジノヴィエフへ

ブハーリンの論文は絶対に役に立たない。「帝国主義国家理論」の片影もない。国家資本主義の成長についての資料の摘要があるだけだ。こういうまったく合法的な資料で非法雑誌をうずめることは、ばかげている。これは、断わるべきだ。(きわめて丁重に。合法的に発表することにはあらゆる援助をおしまないと約束して⁽¹⁾)。

(1) 私としては、標題を変えて、経済的部分だけをのこしておくよう、ブハーリンに忠告を付けくわえる。なぜなら、政治的部分は全然完成されていなければ、考えぬかれてもおらず、なんの役にも立たないから。

だが、多分、ユーリーの論文を待つべきだろう。さしあたりブハーリンには手紙を書かずに。

彼らの「分派」についてブハーリンに手紙を書くことも、待つべきだ。でないと、ブハーリンは、「分派根性」から断わられたのだと、考えるだろう。

≡≡≡

「時代」と「現在の戦争」という問題を、「両極端」として提起することは、まさに折衷主義に陥ることを意味している。まるでわれわれの任務は「両極端の」「中間」をとることにあるかのようだ!!!

| 任務は、現在の戦争との関係を**正しく**規定することだ。これこそ、いろいろな決議 |
| のなかでも、私の諸論文のなかでもやられていることだ。「現在の帝国主義戦争は |
| **例外ではなく**、帝国主義時代の典型的な現象である。[典型的なものは唯一のもの |
| ではない]。 |

時代を理解しなければ、現在の戦争を理解することはできない。

時代についてこのように述べることは空文句ではない。これはほんとうのことだ。私の古い論文からの君の引用も、このことを言っているに**すぎない**。これはほんとうのことだ。

だが、このことから、「帝国主義時代には民族戦争はあり**えない**」という結論を引きだそうとすると、たわごとになる。これは歴史的にも、政治的にも、論理的にも、明らかな誤りである。(なぜなら、時代は多種多様な現象の総和であって、そこには**つねに**典型的なもの以外に別のものであるから。)

君が評注のなかにつぎのように書いているのも、この誤りをくりかえすものだ。

| 「現代では小国は祖国を防衛することができない。」 |
| | | [=俗流論者] |

正しくない!! これこそ、ユニウス、ラデック、「軍備撤廃論者」、日本人らの誤りだ!!

「現代の帝国主義時代にとってとりわけ典型的な**帝国主義戦争**では、小国も祖国を防衛することができない」——こう言うべきだ。

これが違いだ。

この違いに、**俗流論者**にたいする反論の**全核心**がある。ところが、君はまさにこの核心に気がつかなかった。

グリムは俗流論者の誤りをくりかえしている。ところが君は、まちがった定式をあたえることによって、彼を甘やかしている。その反対に、いまこそ、(会話でも、論文でも)グリムのまえて俗流論者を論駁しなければならない。

われわれはけっして「祖国の防衛」**一般**に反対ではなく、「防衛戦争」**一般**に反対ではない。どの決議のなかにも(また私のどの論文のなかにも)そういうたわごとはけっして見つかりはしないだろう。われわれは、1914 - 1916年の**帝国主義戦争**で、また**帝国主義時代**に典型的な、その他の**帝国主義戦争**で、祖国を擁護すること、国を防衛することに反対である。だが、**帝国主義時代**には、「正義の」戦争、「防衛」戦争、革命戦争。[すなわち、(一)民族戦争、(二)内乱、(三)社会主義的戦争、等々]も、ありうる。

第35巻『ゲ・ジノヴィエフへ』P237～238

フリュームスからベルン(スイス)あて

1916年8月に執筆

ポイント

典型的なものは唯一のものではない。なぜなら、時代は多様多様な現象の総和であって、そこにはつねに典型的なもの以外に別のあるものがあるから。

だから、しっかり現実を見て、なにが歴史を前進させる方向に沿うものであるかを見極める能力を身につけなければならない。